



司会> それでは、ひきつづき座談会に移らせていただきます。

本日の座談会は、「まちづくりを身近な取組から考えてみよう」と題しまして、市内で様々な活動をされております皆さんを発言者としてお迎えし、それぞれの活動について、お話をいただき、本日、参加頂いた皆さんと「まちづくり」を身近に感じ、考えていただく機会とするものでございます。

それでは、ここで、発言者の皆さんをご紹介します。

正面に向かしまして、左から、司会進行をお願い致します、横山純一先生、そのお隣から、順に発言者をご紹介します。

- ・町内会活動の取組をお話いただく
久保紀子（くぼ のりこ）さん
- ・まち美化・清掃活動の取組をお話いただく
金尾泰明（かなお やすあき）さん
- ・子育て支援活動の取組をお話いただく
名倉康子（なぐら やすこ）さん
- ・まちなか活性化の取組をお話いただく
有澤満夫（ありさわ みつお）さん
- ・国際交流活動の取組をお話いただく
林 佳奈子（はやし かなこ）さん

最後になりましたが、主催者を代表し、砂川 市長 も参加いたします。

それでは、ここからの座談会の司会進行は、横山先生にお願いしたいと思います。先生、よろしくをお願いします。

座談会

横山> それでは、座談会「まちづくりを身近な取組から考えてみよう」を進めて参ります。

発言者の皆さんよろしくお願ひします。

まず、皆さんから自己紹介を兼ねて、それぞれどのような活動に取り組まれているのか、簡単に、ご紹介いただきたいと思ひます。

発言順は、私に近い方からということで、まず、町内会活動の取組をされています、久保紀子さんお願ひします。



久保> こんにちは、久保でございます。帯広市町内会連合会からということで、来ております。町内会活動といひますと本当に40年50年と町内会長さんをされてご苦勞されている方もたくさんいるんですが、私はほんの短い期間の関わりですが、その経験からお話をさせていただきたいと思ひます。

それと同時に、精神障害者と長年関わってきておひまして、その障害者が地域の中で暮らすこと、それも町内会が、地域活動としてもっともっと関わっていかなければならない活動と思ひましてそのことにも時間があればふれていきたいと思ひます。

私は、今、大空団地に住んでおひまして、9歳から帯広におひますので、ほぼ40年いると思ひているのですが、計算がお得意の方は計算して見てください。紀元2600年に生まれておひますので、算数のお得意の方は、さらに計算を続けていただきたいと思ひます。

長年、帯広に暮らしていてどんな風にまちが変わっていったのか、そして、地域もどのようになったのかも含めまして、町内会活動としてお話しさせていただきたいと思ひます。どうぞよろしくお願ひいたします。



横山> どうもありがとうございます。後で、じっくりとお話を伺いたいと思ひます。それでは続いて、まち美化・清掃活動の取組をされています、金尾泰明さんお願ひいたします。

金尾> みなさんこんにちは、私は、社団法人帯広青年会議所より参加させていただいておひます、金尾康明と申します、どうぞよろしくお願ひ申します。

本日は、後ほど触れるかもしれませんが今年の9月に全国会員大会という全国から青年会議所のメンバーが集まる大会がございます。その関係で理事長が公務のため出張しているものですから、私が代理としてまいりました。



私どもの団体は、明るい豊かな社会を作りたいという崇高な理念のもと、来年50周年を迎えますが、人に関わる事業、教育に関わる事業、経済に関わる事業、今日お話をさせていただく、まち美化と環境に対する事業など、様々な事業に取り組んできております。

早くの段階から私ども市と住民がどうやって連携してやっていくかという環境美化活動をやっております、その中で学んだいい部分ですとか、逆に直さなければ駄目だなという自戒の念もございますが、そのような面も含めながらお話しさせていただければと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

横山> ありがとうございます。それでは続きまして、子育て支援活動の取組をされています、名倉康子さんをお願いします。

名倉> 皆さんこんにちは、名倉です。私は今から12年前、帯広に来ました。出身は東京都で、私の主人は大阪の出身です。

今日はまちづくりということなので、育ちの環境が違うところから来た帯広の住民としての立場と、先ほど横山先生のお話で、三鷹市の子育て支援の取組が始まったときのお話を伺いましたが、11年前に第1子が産まれて、その3年後に第2子が産まれて、今小学校5年生と小学校1年生の子供がいる普通のお母さんですので、このような場に出てくるのは普段ないものですから、とても緊張していますが子供の成長とともに子育て支援ということの必要性とか子供を取り巻く環境の変化などについて思うところもあり、他の団体の方もいらっしゃるので、情報交換ができるということで楽しみにしてまいりました。よろしくお願いいたします。



横山> どうもありがとうございました。それでは続きまして、まちなか活性化の取組をされています、有澤満夫さんをお願いします。

有澤> 有澤でございます。どうぞよろしくお願いいたします。大変大きな課題でございまして、まちづくりということに対して、私はまちの中の定住人口、交流人口について、お話しさせていただきたいと思っています。どうぞよろしくお願いいたします。



横山> どうもありがとうございました。それでは続きまして、国際交流活動の取組をされています、林 佳奈子さんよろしくお願いいたします。

林> 林と申します、よろしくお願いいたします。私は帯広出身ですけれども、幼少の頃から帯広から出たいと思っておりましたが、縁ありまして市の国際交流課に勤めておりました。結婚をき

っかけに退職しましたが、退職後も国際交流に関わりたくて友人を通してイベントに参加したり、行政との間に立って色々な活動を続けていきたいと個人レベルで考えているところです。

市長さんも隣にいてやりにくいのですが、できるだけ本音で皆さんとまちづくりについて、国際交流についてお話しできたらと思っています。よろしくお願いいたします。



横山> どうもありがとうございました。それでは、砂川 市長さんよろしくお願いいたします。

砂川> 私がいたら話づらいということで失礼しようかと思ったけれど、そういうわけにはいかないのでお話しさせていただきます。まちづくり基本条例ができて先ほど先生からお話しがありましたけれど、基本条例ができたからよかった、それでおしまいでは何にもならないので、実際にまちづくりの実践としっかりと結びついて、いい効果を上げていく必要があると思います。



今日の座談会はまちづくりに関連するいろんな分野で、現場で実践されている、実際に活動されている方々のお話を聞けるということですので、大いに参考にさせていただいて、まちづくり基本条例を帯広市政の大事なツールとして活かしていきたいと思っていますので、よろしくお願いいたします。

横山> どうもありがとうございました。私の方で最初に申し上げておけばよかったのですが、座談会の後、私の講演の中身も含めまして、会場の皆さんのご意見やご質問をお伺いする時間をとりたいと思っていますので、ぜひその際は積極的にご発言いただければと思います。

それでは、今自己紹介を兼ねてそれぞれのどのような活動をされているかを簡単にご紹介いただいたわけですが、今度はもう少し具体的に、皆さんが取り組む活動について、お話を伺って参りたいと思います。

活動されていて、続ける上での課題・悩み、また、楽しみなどもあると思います。活動の意義はこういう点にあるということもあると思います。そういった点もお伺いしたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

さきほど、久保さんから順にお願いしましたので、1人ずつ順番をずらしまして、金尾さん、名倉さん、有澤さん、林さん、久保さんの順によろしくお願いいたします。では、金尾さん、よろしくお願いいたします。

金尾> 先ほど前段申し上げましたが、どのような環境美化活動に取り組んでいるのかということと併せまして、それをやってどういうふう感じたかというようなお話しをさせていただきたいと思っています。

私どもで行っている環境美化活動は、主にまちのなかのごみを減らしましょうということから始まりまして、「クリーンキャンパス21」という取り組みをさせていただいています。こちらのほうは2001年にアダプトプログラムという手法を取り入れてやっております。

アダプトプログラムというのは何かという話しになると思うのですが、市民と行政が一緒になって進めましょうという「まち美化プログラム」を参考とさせていただいて始めた経緯がございます。

これはアメリカで始まった手法ですが、まず地域住民の方がそれぞれのエリアを決めまして、そのエリアを自分の子供のように慈しみ、そして自分の子供のように大切にしていこうという、里親のようなイメージで、まず私どもクリーンキャンパス推進実行委員会といたしまして、私どもが一部参加させていただいている地域住民の皆さんとの合議体ですが、そちらと市と合意書を取り交わします。ここの地域は月何回、誰々が清掃いたしますという合意書を取り決めさせていただいています。

地域住民の方はその合意書に沿って清掃活動をし、ちょうどこのリーフレットを皆さん持っていらっしゃると思いますけども、こちらの表紙のところ黄色いジャンパーを着て太目のおじさんが立っていますけれども、こちらの写真のユニホームをお貸しする。傷害保険は市に加入してもらいます。

清掃活動をやっているということのインセンティブを表現するために、クリーンキャンパス21の看板をそれぞれのエリアに立てていただくというような、市と住民の協働による清掃活動をさせていただいています。

今現在、7エリアございまして、登録人数は3,000人となっています。この活動を通じて目に見えて感じていることなのですが、私は2003年からかれこれ5年になります。

この会場にも、先輩がたくさん来ておりますが、当時、30分ぐらいでしょうか、市内中心部の清掃活動をただで、両手に抱えきれないぐらいのごみがあったのですね。

タバコの吸殻や空き缶はもとより、家電製品があつたりしました。ところが、ある時期からぐっと変わった時期があるんですね。一昨年从去年ぐらいであったと思いますが、春と秋に全体清掃を行なうのですが、そのときにもものすごくごみが少なくなっていることに“はた”と気づきました。

リーフレットの写真は、その頃のものと思いますが、今ですとごみの量は、片手で十分なほどで、ごみはどこかにないかと探して回るような状況で、それ位ごみが少なくなってきたというは、市内中心部だけかもしれませんが、実感をしております。

“どうしてかなあ”と自分でも考えたのですが、例えば、ごみの有料化というのがあり皆さん意識の中に定着していると思いますが、また、空き缶ですとかタバコの吸殻のポイ捨て禁止条例というものが浸透してきた、そのようなことから一人一人の皆さまの意識が相当高くなってきたということが、結果的にこういうことに繋がっているのではないかと感じております。

まちづくり基本条例の話も先ほど伺いましたけれど、まずは皆さんに知っていただくということ、知っていただいた上で、意識をしていただく、意識をした上で一人一人が行動を変えるとい

うのは難しい部分があるのですが、社会のルール、もしくは、まちで決めたルールというものをまずは意識しながら、参加する、もしくは、出来ることからやっていくということの積み重ねが、目に見えて違う部分が見えてくるということが一つまちづくりに繋がるきっかけになってくるのではないかと考えております。

逆に、これからの課題としては、まちの中の意識が高くなってごみが減ってきたとすると、何もまち美化清掃活動というのは、ごみ拾いだけではありませんで、次の段階として、どういうことをやっていけばいいのかなということ、逆に、まちづくりの基本条例と照らし合わせて、皆さまの意見を伺い、すすめて行く段階にきていると考えています。

まずは、次世代にどうやって、このいい環境というものを引き継げばいいのかということ、もしくは、この手法を活かして他の地域の皆さんとどのような形で連携をとっていけばいいのかと、そういう意味では、先ほどのお話の中でも情報公開というお話がありましたので、これからはどんどんと情報を共有するような形で、新しい形のまちづくりに、ポイ捨てゴミということに関し、例えば、そういうような時期に入っているのではないかと考えております。

横山>はいどうもありがとうございました。

それでは続いて名倉さん、よろしくお願いします。

名倉>パンフレットに、子育て支援活動の取り組みということで書いてあるんですけども、子育て支援活動というのではなく、一人のお母さんとして、子供を育てている毎日の生活の中で出てきた活動とかボランティアとかそういう取り組みだと思っておりますけれども、第1子が産まれた11年前の帯広は、私は先ほど自己紹介のときに申し上げましたように、東京都出身ですので、まず帯広に来たときに“人はどこに歩いているんだろうな”というのが第一印象でした。

東京都でも渋谷ですので、人が溢れかえっているところでしたので、確か人口は16万人か17万人いると聞いているけれども、赤ちゃんを連れている人はどこにいるのかなと、みんな車で移動していて、どこにいるんだろうというのが当時思ったことです。

結婚したときもそうですし、子育てを始めたときもそうでした。当時はスーパーの遊び場所が、皆さんお気付きだと思っておりますけれども、一角に子供を遊ばせるスペースがありますので、そういうところに行ってみたり、お散歩に行くと、保育所の先生が遊びにおいてと声をかけてくださったり、公園も人がいたりいなかったりなんですけれども、そういうところに行ってみたりということで、都会の中で子育ては難しいとよくいわれていましたけれども、知らない人のコミュニティの中で子育てすることの難しさを実感しました。

そのとき、赤ちゃんサークルがあるから入らないかというお誘いを、同じ産院で出産したお母さんから受けてサークル活動に参加するのが始まりで、そこから私の子育てと友だち作りが始まっていったと思います。

当時は今みたいな遊びの広場はなかったので、サークルに入って友だちを作ることが、子育てを楽しくしていくのにとっても大切な役割があったと思います。

それも11年前ですので、年数が経つにつれ「子育て支援センター」ができ、当時は「子育て支援システム」という名前でしたけれども、そこができ、「もっくん広場」ができ、「もっくん広場」ができたときには、“なんて画期的な場所なんだ”とすごく嬉しかったのを憶えていますけれども、そういう場所ができ、今は子育て支援センターが市内にもたくさんありまして、一般のお母さん、それからサークルで活動しているお母さんがそこに集っています。

「子育て支援」という言葉自体も多分、その言葉ができた当時は皆さんは、“どういうことだろう、みんな子供は育てるに決まってるだろう”という感覚の方が多かったと思いますし、私自身も「子育て支援」というのは言葉としては変だなと思っていたんですけれども、今10年以上子供を育ててみて、その言葉が的確かどうかは分かりませんが、今日のような、まちづくりを考えた上での子育てというのは、子育てをしているお母さん、そしてその家族であるお父さん、その家族がいる町内、子供が大きくなって通う幼稚園、学校というふうに環境がどんどん広がっていくと思うんですけれども、その中で無理なく役割が果たせるような環境づくりをしていくことが子育て支援、あるいはまちづくりということなんじゃないかなと思います。

これからの課題というのは、そういうサークル活動を一生懸命やっていたり、情報交換をしたりとか、お母さんたちも他の団体、町内だったり色々なコミュニティの中で、誰かのためにというのではなく、最初は自分のためにでもいいと思うんですけれども、そういう気持ちでまちづくりの中で自然に役割を果たすというような環境ができたらいいな、というふうに思っています。

帯広には素敵なお母さんたちがたくさんいるので、「あのお母さんは・・・」というようなことをよく言われてしまうんですけれども、「若いお母さんは・・・」とか。でも素敵なお母さんがたくさんいますので、まちづくりの中で、子供が元気に明るく育つということは大きな喜びだし、まちづくりの中で大切なことだと思うので、ぜひそういうお母さんたちを引っ張り出して、色々なコミュニティの中で連携をとっていけたらと、私たち自身も意識を持ち、まちの人たちも意識を持ってということだと思います。終わります。

横山> どうもありがとうございました。それでは、有澤さん、よろしくお願いします。

有澤> 有澤でございます。どういう観点からお話しをしていくか迷っているんですが、今帯広の中心部ということを考えてみますと、非常に街路整備も整いまして、鉄道も高架になったということで非常に街は歩きやすくなりました。しかしながら、歩きたくない街。先ほども言われましたけれども、人がどこにいるんだろうかっていうのが、本当に帯広の中心部の現状かなと思います。私は西1条9丁目で衣料品店をやっているんですが、昔のことを考えてみますと、店の外をずっと駅の方を見ますと、人がたくさん歩いていました。何人も歩いていて、街の中心部というのは人がたくさんいるんだなと思っておりましたけれど、今現在、私どもの店の外から駅の方を見ますと、あっちに一人、こっちに一人という、本当に数える程度で駅までがすっきり見えるようなきれいな街路整備が出来上がりました、非常に悲しい思いをしています。

街というのは中心部にピラミッド型のたくさんの機能を含んだものがあって、だんだん街が拡

張されるということは裾野にそれが広がってくるというのが、街の一番いい形ではないかなと思います。

現状は、裾野が広がっちゃって真ん中が空洞化しているという、とんでもない街になりつつあるのではないかなと非常に心配しておりまして、色んなところに視察に行って、賑やかな街を見て参りまして、賑やかなところというのは必ずそのそばに住まうところがあるんですね。それが絶対の条件だと思っておりますし、実際に賑やかなところは、元気な街はそういう状態でした。

そこで、私も西1条の商店街に加盟しておりまして、街の中に商店街の人たちが何人住んでいるのかなと数えてみました。今、組合員が54名いるんですが、数えてみると片手5人、6人、世帯が住んでいるだけであとは郊外から通ってきています。

街というものは、これじゃあ絶対的な機能を果たすことにはならないんじゃないかなと思いついて、とにかく街の中に人が住んでもらうためにどうしたらいいのかなと、もう6年になるんですが、西1条8丁目に「エバーハウス菜の花」という高齢者下宿を作りまして、今14名住んでいるんですけれども、高齢者の方が街の中に住むということは非常に元気が出るようになっています。色んな高齢者下宿とか施設が郊外にはあるんですが、街の中の賑やかなところ、目と耳で社会の動きが分かるようなところに住まうことは、非常に若返るというか老化を防ぐ1つの大きなことかなと思っていますし、年齢を重ねることによって加齢臭がするんですが、「エバーハウス菜の花」の住んでいる方は一切加齢臭がいたしません。街の中に住んで元気になってきているかなと思っています。

そういうことも含めて、今、街の中に住まう方が、街の中にマンションとか借り上げ住宅とかができてきまして、街の中に人口が増えてきております。それが街にいい貢献ができるのではないかなと思っておりますし、実は昨年から定住するばかりではなくて交流人口も増やさなくてはならないんじゃないかとも考えまして、昨年の6月18日から9月の10日まで毎週日曜日に西2条の9丁目、8丁目、広小路さんの一部と藤丸さんの前の一部を使いまして、「帯広まちなか歩行者天国」をやらさせていただいております。

実は今、実行委員長が会場にいらっしゃるんですけれども、私が副実行委員長をさせていただいてまして、街の中を色々なことで人が来てくれるということは、街の中の新しい発見もあると思うんですね。魅力も感じていただけるのではないかなと思っております。

街の中に歩行者天国ができたのは、色んな関係機関の方の協力がありましてできたわけですし、色んな許認可を取らなければいけないわけですよ、道路を使用するというところで。帯広土木現業所の協力、十勝支庁、帯広市、帯広警察署、帯広保健所とか、いろいろ許可等を取らなければならぬんですけれども、行政の方たちも帯広のまちづくりに対して本当に力になっていただいて今年2年目を迎えるんでありますが、さらに街の中の賑わい創出に力を入れていきたいなと思っております。

とりとめのないお話しでございますけれども、街の中は人が住む、そして交流人口を増やすんだという意気込みで頑張っているところでございます。よろしくお願いたします。

横山> どうもありがとうございました。それでは続いて林さん、よろしくお願いします。

林> 私は「菜の花」のすぐ横に住んでいますので、人ごとではないなと思いながら色々と考えさせられました。

私は国際交流の話なんですけれども、国際交流というと堅苦しい感じがするんですが、私の最初のきっかけは勿論、市の国際交流課で働かせていただいたということがあるんですが、結婚して育児と主婦をしておりますと社会への参加が全くないんですね、「何々ちゃんのお母さん」もしくは「何とかさんの奥さん」。そんな中で社会に参加したいなということから、好きな英語を使って子供に、小学生を家に呼んで英語を教えたりですとか、英語をずっと勉強を続けたい主婦や仲間が集まってディベート、ディスカッションをして、そういうときに外国人の人に来てもらって一緒に勉強する。

小学生の子供に私が勉強を教えるときには外国人の友だちにも来てもらって、一緒に授業をしてもらう。そういったところから外国人の友だちがだんだん増えていきました。

市に女性青少年課がありまして、そちらでやっている乳幼児学級というシステムがあります。乳幼児を持つ母親たちが集まって勉強会を月に1回します。そのときの講師料ですとか、子供をその間託児してくれたりとか、そういったことを市の方で受け持ってくれます。私はそれにずっと今も入っているんですけれども、その学習会のときにも外国人の講師を呼んで、お母さまたちとみんなで外国人を通して、料理を一緒にしたり、色々質疑応答をしたり、そういった機会にも恵まれて、本当に地域レベルというよりは個人レベルなんですけれども、国際交流の草の根の部分で少しお手伝いできているかなという実感をしているところです。

ただ問題に思うところは、国際交流に携わる人とは大抵いつも決まった方が多いです。毎回色んなイベントをして取り組んでます、国際交流イベントに。それに参加するのはいつも大抵同じ方ばかりなんですね。国際交流のボランティアについても一緒です。その点では行政の側も大変苦労していると思います。

実際帯広には、「北海道国際センター帯広」、「森の交流館とかち」など素晴らしい施設があるんですけれども、そこを利用する人はわりとリピーターが多いんですね。なのでもう少し多くの方に利用してもらうということが課題になっっていると思います。

私自身行政の方でいたときには、国際交流を皆さんに周知することの難しさを感じていました。それは国際交流だけでなく、先ほどの名倉さんの子育て支援についても、まちの美化についても、まちづくり全体に市から市民に呼びかけるというのは苦労があると思います。なので、個人のレベルでもいいので、国際交流に関わらずこちらからも情報を知りたいという意欲と意識改革ですね、個人の意識改革が、先ほど先生もおっしゃっていたように、行政と市民が意識を改革していくことが最終的な大きな目標になると思っています。

国際交流という言葉はとても難しい感じがするんですけれども、私が育ってきた環境の中では、外国人が学校に来ることはありませんでした。今の小学生、中学生、必ず外国人が行って授業を

しています。そういった恵まれた環境を活かして国際交流が教育に使われるということ、これからお父さん、お母さんよりも若い世代の人たちに伝えるためにも今国際交流についてもう少し考えてみたらどうかと思います。すみません、長くなりました。以上です。

横山> どうもありがとうございました。それでは続きましてですね、久保さん、よろしくお願ひします。

久保> 町内会活動からということなのですが、具体的にいうと大変広い、広範囲な中身になるのではないかと思います。現在帯広市内には町内会が762、大小色々あります。10人しかいないところもありますし、500人以上いるところもあります。更にそこから連町という連合町内会をつくっております、そこから今度は連町47、そして帯広市町内連合会というものがあるわけですね。

町内会活動、課題はたくさんありますけれども最近少し変わってきたところをお話ししたいと思うんです。子供はいなくなった、会員は高齢化した、じゃあ担い手はどうだろうかということになってきますけれども、ここにいらっしゃる方は全て多分町内会の会員でいらっしゃると思うんですね、一戸の家からコミュニティができていますけれども、今は70%の加入率となっています。

色々な面で今問題がないわけではありません。ですけれども例えば自分の町内会で子供がいなくなるといふことになると、子供会なんかなくなった。でも、地域の子供たちをみていこうということで、青少年部というのが残ってしまったり、例えば私の住んでいる大空団地は人口5,000人ですけれども、本当に子供がいなくなったんですよ。高齢化率でいうと帯広市内で一番高いのではないかなと思うぐらい高齢化が高いんです。

そうしますと夏のラジオ体操をどうしようかということになったんですね、昔はあっちこちでやっていましたけれども、ここ数年前からは、ちょうど中学校と小学校がありますけれども中学校側に公営住宅がたくさんあるものですから、中学校をお借りして毎年夏休みが始まってから終わりまで毎日6時半からラジオ体操をやっています。

そうすると200人、多いときは300人近い方々がグラウンドに集まってきて、小学生から幼稚園から、お年寄りまで集まってくるんですね。その中で、「元気だったかい?」「こんにちは」「昨日来なかったけどどうしたの?」とそんなことができるわけですね。

それから、ある大きな連町の話ですけれども、色々見守りということが出てきましたけれども「みどりのおばさん」がなくなった。どうしよう。地域の方集まってくださいとなって、その場合は校区では2か所、みどりのおばさんが立っていたんだそうですね。なくなったのでなんとか地域の子供をみてくださいといって、2か所いってということになったんだそうです。

そのときに地域の皆さん方は、たった2か所かいて、もっともっと危険なところがたくさんあるんじゃないですか、それだったら地域みんなで登下校時を見守ろうと、そういうふうな大きな力の輪ができてくるわけですね。

それはある時期帯広市内では、子供たちが増えたそんな時に色んな団体ができてきたんですね。ところがその団体と色んな関係で繋がりが薄くなってきて、それぞれが町内会とあまり関わりなく進んでいる会もできてきてしまっているわけですね。

今日ここに6人集って6人別々な色んなことをしているわけですが、そういう人方がどこかで繋がっていかなければ、力強い熟成した地域コミュニティにはならないのではないかなと思います。

控え室で有澤さんとお話をしながら、「菜の花」のお話しをお聞きしながら、私も何かそんなのだったら、できるのではないかな、なんてヒントをいただいたりしております。

ですから、それぞれ自分たちはここまでできる、他の団体もここまでできるっていうその繋がりを、今もう1度地域に戻してみんなで考えていけるいい機会ではないかな。

また、まちづくり基本条例、この条例も協働ということが出ていますが、我々できることは必ず一人一人何かあるのではないかな、それは町内会活動でもボランティアでも、もう1度自分にできることを見つけるいいチャンスではないかなと思ってこの条例のお話しを伺ってありました。

大空というまちに住んで、いつも大空のことを話しますと、大空は別だからねって、あの島のような所だからねって言われるんですけど、帯広市内では色んなかたちで動いているのではないかなと思っているんですね。

それで地域の意識を高めようということで、地域通貨も使っております。それでお互いに、昔で言ったら「手間換え」といいますが、そういったこともやってるんですが、それもお年寄りはずいぶん誰かにしてもらってばかりだけれども、何か自分でできることはないかなと、この通貨(ソラン)を自分ももらうばかりでなくて使いたい、使ってるばかりで貯めれない、貯めるためにはどうしたらいいかということで自治会でも別な事業を始めています。

古い傘を利用して買い物袋を作っているんですね、「大空ブランド」というのを作って売り出しますのでそのときはよろしくお願いします。

次々考えることによって、いつまでも町内会が、役員が大変だ、高齢化してるというのではなくて、一人では出来ないけど班で、班では出来ないけど町内会で、町内会では出来ないけど連町で、連町で出来ないことを市町連でということで、こういう関わり方をしていく時期なのではないかと思えます。そこに繋げてですね、長いこと精神障害者のボランティアをしておりますと、精神に障害を持った方は、ある一部分で固まってしまって、なかなか地域に認められませんでした。ようやく帯広市は、(市長がいるからとうわけではないのですが)全国で一番精神障害者に対する支援のしっかりしているまちなんです。日本一行政の支援が受けられているという「まち」なんです。皆さんご存知ないかも知れないのですが。

ですから今回のマディソン市との交流もできて、先に精神障害者が進んでたということできたことなんですが、これも市民協働、ボランティアなり、関係者が一生懸命やってきたことが実ってきた、市と一緒に活動ができたということになっていると思っております。課題については後で時間がとれればお話ししたいと思います。

横山> どうもありがとうございました。以上5名の方のお話しをお伺いしたのですが、砂川市長の方で何かございましたら。

砂川市長> 皆さんのお話しを聞いて、自分たちの住んでいる「まち」あるいは自分の生活をより良くしようという思いが原点だと思います。その思いを地域の中でどう活かしていくかということができれば一番いいことですが、それぞれの方、それぞれの方法で、あるいは自分の課題でまちづくりに貢献していっていいわけですね。そういうことが原点だと思います。

最初から「まちづくりをやるから皆さん頑張ってよ」といってもあまり効果が無いんじゃないかと思えます。自分に一番ためになることが大事だと思うので、そのためには地域はよく考えていかなければならない。そのことが結果的には「まち」全体が良くなっていくことに繋がっていく。こういうことがあれば、市民の皆さんも積極的に何かの活動をやってみようかなということに繋がってくるのではないかという印象を受けました。以上であります。

横山> どうもありがとうございました。金尾さんからは、自分たちの活動を知っていただくことから始まるというお話がありまして、それがまちづくりのきっかけになるし、情報の公開だとか意識の改革、そういったものにも繋がっていくのだということでした。

久保さんの方では、どこまでだったら自分たちでできるのか、地域でこういう問題があるんだ、それに対して町内会やボランティアなどは自分でできる範囲でどこまで頑張れるか、そして課題を見つけてそれをどういうふうに解決していくかについて、示唆に富んだ発言をいただきました。また、地域通貨のことについてお話しされていましたが、それぞれの地域の中において自分の一番関わっているような問題に対して取組んでいく。それが大きな取り組みであったり小さい取り組みであっても、とにかくきっかけが大切になっているということでした。

当初は質問者でやり取りをと思っていたのですが、時間の関係でもう1つお聞きしたい点がございまして、そちらに入らせていただきます。

先ほどからお話ししましたように、「まちづくり基本条例」というのは行政と市民で協働で行っていくまちづくりの大切なルールを定めているものなんですね。

作っただけでは勿論ダメで、これを市民と行政が尊重し、それぞれ育てていく、そしてそのことを通じて条例を育てていきながらまちづくりを進めることが大切なわけです。では、まちづくりを進めるために、今何が必要なのか、何が足りないのか、また、それを解決するために市民が取り組めること、あるいは行政の努力が必要なこと、行政と市民が協力していかなければならないことなどいっぱいあると思うんですが、かなり今までのご発言の中でも、示唆に富むご発言があったわけですが、全体としてこの条例に関わるところで感想も含めましてどのようなことでも結構ですので、ご意見をお伺いしたいと思います。それで今度は順番でいきますと、名倉さんからお願いしたいと思います。よろしく申し上げます。

名倉> 子育て支援という立場から考えますと、先ほどのお話にあったようにコミュニティ間の連携ということはあると思います。

市で、子育てをしているお父さん、お母さん達のためにこういうことをしたらいいんじゃないか、あったらいいなと思うことがどんどん実現してきた10年ほどだと思いますけれど、今赤ちゃんを持っているお母さんはそういう状況に慣れ、当たり前のように、私が当時、遊び場がどこにもないと思ったのとは違う感覚で子供を育てているかもしれない。

そういうお母さんが、こんなことがあったらもっとより良い環境だと思うことをどんどん聞いていくのもいいんですけども、そうすると、してもらう支援というか、受身的な、“他の行政ではこんなことをしているのに、うちの市ではしてない”とか要求が溢れてきてしまうように感じます。

これからは、お母さん達も市長さんがおっしゃったように、自分のためになることをして、それが結果的に「まち」のためや、ほかの子育てをしている人に貢献できることだったらいいなと、そのような環境を整えるというのは大きなことなんですけれども、それが目標というように感じます。

今、学校や保育所は、昔だったら学校は勉強を教えてもらうところ、保育園は働いているお母さんの子供がどうしようもないので預けるところという認識から、数年の間に変わってきて、「まち」という地域の中での学校や保育所の役割は、建物そのものも、中にいる先生たちやPTAなどソフトな部分も含めて意識を変えていかないといけないし、重要な地域の役割を果たすものだと考えています。

私の出身の渋谷区の小学校はドーナツ化現象で、とうの昔に廃校になっています。子供が全然いなくなってしまったので、10年ほど前からコミセンのような役割で小さな図書館が中にあったり、地域の人がスポーツを楽しんだり、空き教室を使って勉強会をしたりというような建物の活用の仕方をしています。

帯広といってもとても広域なので、地域によっては子供の人数がとっても増えている校区もありますし、減っている校区もあると思うんですけども地域での細かい役割の中で学校をもう一回見直し、あるいは保育所を見直して、子供の育ちの環境を整えることがまちづくりの1つの大きなポイントになるかなと思います。

行政にさせていただきたいと思うところもありますし、私たちも意識してやっていかなければいけないかなと思うところです。以上です。

横山> どうもありがとうございました。続いて有澤さん、よろしくをお願いします。

有澤> 同じ事をお話ししなければならないのかなと思っていますが、本当にドーナツ化現象が進んでおりまして、中心部は大変に寂しい思いをしております。考えてみますと学校の話はしましたが、街の中に学校がないんですね。ですから子供たちもいない、ちょっとおかしいんじゃないかという気はしております。それと同時に今帯広市の人口は17万ちょっとですか。少子高

齡化ということで減ってくるわけですけど、人口増は見込めない状態でまちづくりを考えなきゃいけないということだと思っておりますが、人口増も当然ながら、観光も通した交流人口を増やすとか、地域間同士の交流を図るとかということで街の中に元気をつけていきたいと思っております。

歩行者天国のお話しをしましたが、街の中に人が来てくれるということは、交流人口を増やすということにつながりますし、帯広のまちの景観とか楽しさを発見できる気もしますし、そういうことで歩行者天国、今年は13回開催する予定をしていますけれど、盛りだくさんのイベントを通して街の中に人が入ってこれるような、入ってきやすいような、まちづくりをしたいなと思っておりますし、これからも協力いただいております関係機関の皆さんと共に街をもう1度、元気で楽しいまちづくりに協力していけたらと思っております次第であります。

横山> どうもありがとうございました。それでは林さん、よろしくお願いします。

林> 私も先ほどと重なることになるかと思いますが、国際交流をしていく上で、皆さん普段の生活、居・食・住があれば、そこがまず一番基本だと思います。国際交流となるとそのまた先のようなところの部分だと思います。なので全員が興味を持って取り組むということはなかなかできないことではあります。

市の予算的にも国際交流が一番カットされやすいのかなと不安に思うこともありますけれど、そういう意味ではこのまちづくり基本条例というのは、市と行政が一緒になって作り上げていく、国際交流もそういった形が一番自然な形でしかも長続きする、先ほど先生がおっしゃった“すぐ効果がなくても長い目で見るとずいぶん効果が現れる”実際私が幼少時代から見ますと外国人のかたがたくさんいて色んな分野でそれぞれ子供たちが交流していたり、大人たちが交流していたり外国人が居るこの環境がいい効果を上げていると思っております。

ですので、まず市民は、行政に気になることは相談する。まず興味を持って積極的に相談する。そういった意識改革が、今後大事になってくると思います。

私自身小さいレベルですけども、自分自身が社会に参加して国際交流に携われるという喜びも感じていますので、どんな分野でもよろしいので、皆さんも何か気がいたらまちづくりに参加したと思えるような、自分にとってまことにいい結果が出るようなことに興味を持って、積極的に行政に携わってもらえたらと思います。以上です。

横山> どうもありがとうございました。それでは久保さん、よろしくお願いします。

久保> まちづくりと申しますか、全体的にみて、お年寄りが集る色んな会なんかでてきても、受益者負担金、今あるサロンでは参加するために100円いただいているんですが、もう市でやる行事はただではない。昔、料理教室なども無料でやっていたけれど、自分の食べるものくらいは払う。そういう意識で受益者負担金制度がありますが、ある部分ではきちっと自分も払うけ

れど、きちっと市の方でもやってもらう。そういう意識も変えていかなければ、全部おんぶに抱っこではダメかなと思うんですね、これはここだけの話なんですけど、ある、図書館の策定委員になった方なんですけど、こんなことをおっしゃっていました。

人が凄くいるからあそこで入場料取ったらどんなに市で助かるべな、とおっしゃってた方がいたんですね。そんなつづやきも出るほどですので、図書館でお金を取るなんていうと全部芽室や音更のほうに行っちゃうかもしれないんですが、でもある部分で私たちも、勿論、体も使いますけれど、どこかで受益者負担金ということも頭にいれておかなければならないかなと思っております。

横山> どうもありがとうございました。それでは金尾さん、よろしくお願いします。

金尾> 先ほどから情報の共有とか、情報の使い方ということがキーみたいな言葉として取り上げられているのかなと思いますが、ところがその情報というのが非常に厄介なものでして、例えば仕事をやっていて、うまく自分が伝えたい言葉が全員の社員に伝わっているのかなという、そうじゃない場合のほうが実はものすごく多かったりして、その部分をどういうふうに分けて使うかというのが大事なのかなと思います。

例えば、継続してやっていることで、すでにもう取り組んでいらっしゃるということであれば、その取り組んでいるところと取り組んでいるところとをうまく仲を持つような、例えば情報が必要でしょうし、林さんがおっしゃるように、気づいたらまちづくりに参加していたというふうな状況を作るには、誰もが出入りできるフラットな、そして最初ですから気軽な楽しい情報を与えて、なるべくストレスなく、まちづくりや色んな活動に参加してもらえる、そういう情報をどういうふうに作って流していくか。

そして、気づいたらまちづくりをやっていた。参加すると、ああすれば良かったな、こうすれば良かったなとか、疑問点が出てきたりとか、こうしてみようだとか、色んな考えが生まれるんですけども、参加しないことには何も出てこないという意味では、その情報の使い方をどうやっていくかというふうに思います。

僕は子育て支援とかの会議によく出ていたことがあるんですけども、背広を着ている、一見偉く見える、お母さんたちからするとすごく“おっかないな”というようなかたに囲まれて、お母さんの意見を下さいと言われてもなかなか言えないですね。「いやいや私はこんなことしゃべる身分じゃありませんから」なんて話しになっちゃって、全然会議が進まなかったりだとかそういうストレスをなくし、どうやったら参加してもらえるのかという仕掛けを、行政も含めて僕らも考えていければと思っていますし、もう一つ、何か皆さん参加して必ず訴えたいことは言うんですけども、それに対する答えだとか考えというものをどうやって早くその人に対してバックできるのかと、2回言って3回言って何も反応ないのでは、やってられるかと、もういいわというようなことが実は多いです。反応がないということがやはり一番きついことでありまして、そういうようなことでは、説明責任と14条では書いてございましたけれども、迅速に的確に対

応してもらったほうが、先生がおっしゃっていましたように、冷静に客観的にそれがいいのか悪いのかというようなことを判断しながらお互いにより良い方向に向かって進んでいく、そのようなコミュニケーションを高めることが、まちづくり基本条例を成功させる1つのきっかけになるんじゃないかなと思っています。以上です。

横山> どうもありがとうございました。様々なご意見をいただきました。本当に参加のきっかけがすごく大事な感じが致しますよね。そのためにどういうことをしていったらいいか。

行政の役割もかなりあると思うんですよね。協働の推進という9ページを見て欲しいんですけども、機会の拡大だとか、9ページの真ん中から下なんですけれど、説明の文書が出ておりまして、帯広市市民協働指針というのがあるんですね、これは基本条例の前に帯広市が市民協働指針というのを作っているわけです。平成15年12月策定ということですね。

こういったものを参考にして私たちは基本条例を作ったわけなんですけれども、その時市民検討委員会でもずいぶん議論したのは、「参加するきっかけがなかなか無い」という声が結構あるのが現状で、これをどうやっていったらよいかを考えていかなければならないということでした。各種の団体にお入りになっていたり、かかわっている方は色んなかたちで市民活動に参加するきっかけがあると思うんですよね、例えば、町内会で非常に熱心にやっておられるかたは参加しやすいんですけども、全員がそう簡単にいく話しでもないと思うんですね。

これをどうしていったらいいのかというの、これから考えなければいけない一つの点だと思います。環境の整備、団体相互の情報公開、活動拠点の場を確保するとかですね、人材育成、協働の担い手に関する要望の機会の提供、機会の拡大、自主的活動や協働の取り組みへの関心を高めるための研修会や講演会の開催とかですね、いずれにしても、参加のきっかけになるようなことを、これからどうしていくのかというのがあるのかなという感じがいたします。

環境の整備の中の活動拠点の場の確保みたいなものをこの中に盛り込んでいるわけなんですけれども、大切だと思うんですよね、色んな各種団体の方ですと、色んな活動に割りとすぐ入っていく。名倉さんの場合も、最初は戸惑ったけれども、サークル活動に入ったから色んな場が広がっていったわけなんですけれども、そういうきっかけづくりみたいなものがこれから必要です。

そのきっかけがなかなか掴めない市民の方がいっぱいいることも事実だと思います。このへんが1つの課題になっているのかなと思いました。それから、情報の問題ですと、金尾さんがおっしゃっていましたけれども、情報の提供の仕方は本当に大事なんですよね。

確かに私は客観的に自分の都合の悪いこともきちんと正確に理解しないといけないと言ったんですけども、行政のほうも情報を提供するだけじゃないんですよね、解りやすく提供しなければならぬと思うんですよね。難しい行政用語でバーツと書いてあるようなものを提供されたってまず理解不可能ですよ市民の皆さんは。ですからそういう面で言うと、解りやすく提供するというのも、同じベースで議論するためにも必要な情報の共有だと思います。行政の方も工夫して提供すること、解りやすく提供することが必要ではないかと思います。

それから、久保さんのお話で、受益者負担。無料ではないというお話だったのですが、これ

は受益者負担金をどの部分で取って、どの部分では取らないのかの見極めが必要だと思いますね。図書館みたいな教育行政の部分になりますと、これは取る行為が難しいのではないかなと思うんですよね、だけどパークゴルフ場みたいなものは入場料金を取るとかですね、そこらへんの区分も必要になってくるのかなと思いました。

それから、林さんの国際交流なんですけれども、おそらく帯広市内の高校も、高校の中では国際交流をやっていると思うんですよね。私の大学の系列の北海高校という高校があるんですけれども、フィンランドの高校生などさまざまな国から来ています。また、帯広市内の色々な団体なんかでも、外国から留学生として呼び出してということがけっこうあると思うんですよね。

それと、市や林さんが行っているような国際交流、そこはおそらく連携とか結びつきが弱いのではないかなと思うんですよね。ですから国際交流というときに、行政やあるいは林さんたちがやろうとしている活動というのが、どういう国際交流を目指しているのか、イベントなどに今まで同じ人ばかり来るのであれば、少しスタイルを変えてみることも必要かなという感じもするんですけどね、どうですか、林さん。

林> 私は市の国際交流のイベントで、外国人と一緒に出席したりしているんですけれども、言葉の壁が一番あるかなと思います。

横山> なるほどね。なかなか市民の方は参加しづらいと。

林> はい。ただ、わりと日本語を頑張って勉強して、外国人側も努力しているんですよね。なので、言葉ではないということを一度来てもらえば分かるんじゃないかなと期待したいですね。

横山> なるほどね。ありがとうございます。それから、有澤さんの部分なんですけれども、これは名倉さんとも共通するんですけれども、中心街、商店街ですね、中心地はだんだん人がいなくなっているということなんですけれども、中心街で物を買わなくなっているとか色々あると思うんですけれども、若いお母さんである名倉さんからすると、帯広の商店街とか、そういうものをどう思われますか。

名倉> 帯広という都市は、本州だとか、他の色々な県から見ると郊外型の中堅都市という認識なんですけれども、大型店があって、車社会で、という所なので、私が育った所は駅があって、電車が通って地下鉄が通って、駅前に商店街があって、家までは駅から遠いけれども、商店街を通ってお買い物をしてバスで家に帰るとか、そのような生活体系だったので、帯広に来たらペーパードライバーだったものですから、運転できないと非常に不便だと他の都市から通勤してきたお母さんはよく言います。

市で年に2回「子育てパパママおしゃべり広場」というのを開催してまして、これは“あったらいいな”のきっかけから始まったんですけれども、市の外から通勤してきた人が市内で情報を

得たいとか、まだまちのことがよく分からないというかたが、親子で集りまして情報交換をしたり、市内にいる先輩ママさんに色々お話しを聞いたり、仲間づくりをしたりというふうになっています。

そこで多く言われるのは、自分の住んでいる家は帯広の中のどこにあって、とりあえず住んでみたら近所のスーパーへは行ってみたけれど、図書館はどうやって行ったらいいんだろうとか、コミュニティセンターとか子供が集う場所、支援センターはどこにあるんだろうとかそういう情報が知りたいということで来るお母さんが多いです。

話がそれちゃいましたけれども、“まちなか”という、この“まち”という言葉自体、私は例えば有澤さんとかとは認識が違うなと感じているんですけども、多分“まち”というのは私にとっては帯広市という広域のものの中で、町内会だったり、学校単位の、地域=(イコール)“まち”というものなんですけれども、中心街=(イコール)“まち”っていう認識はあまりないんですが、今、子育てをしているお母さんが、地元の方が言う“まち”っていうのは駅前とかのことなんでしょうか。

そのあたりは、車でどこにでも行けるのでなかなか足が向かなかったり、駐車場が停めやすかったりそういう観点で行動をしているように思います。

藤丸の上に市民交流センターが出来まして、子育てのお母さんたちが集える場所があって、サークルでも使用できるようになっているんですが、駐車場が有料ということと、停めづらかったりとか、エレベーターで上がらないといけないとか、そういうことでなかなか利用が伸びないのではないかなという感じをもっています。

横山> どうもありがとうございました。有澤さんにお聞きしたいのですが、これから商店街というのは、期待感もふくめて言うのですが、私はもう1度復活するのではないかと考えているんですよね。

高齢社会がどんどん進んでいきますよね、これから。私が6、7年前にスウェーデンに行った時に、超大型のスーパーがあったんですよ。それで、案内してくれたスウェーデンの人が、ここはもうスウェーデンではこれからそんなにできるようなスーパーではないんだと言うんですよ。それはなぜか、今スウェーデンの問題は何かといたら、後期高齢者が増えているんですよ、75歳以上の。つまり日本よりも早く高齢者比率が20%を越しましたからね、その人達が75歳以上になっちゃってますから。

後期高齢者はたいがい、車の運転ができないわけです。それから、超大型スーパーですとどこに商品が並んでるのか分からないんですよ、高齢者の人は。探せば探せますけど根気がいる話なんですよ。ですからそういう面で言うと、むしろ地域で歩いて行ける範囲に、そんなに大きなお店でなくてもいいけど、地域のコンビニ的なお店があれば違うわけですよ。

そういう面で言うと、もう一回地域活性化というか街中活性化、商店街活性化の可能性というのはあると思うんですけどどうでしょうか、有澤さん。

有澤>今先生が言われたとおりだと思っておりますし、いずれは交通弱者であるお年寄りの人もやはり街の中に住まわなければならないという状況になってくる。

ですから中心部の商店街というものは復活する、そのように僕は先生と同じ考えでありますけれども、それが、この先10年後なのか、20年後なのかという問題が控えているところだと思います。

横山>そういうときに行政としてはどういうことを考えていくかとか、行政だけでなくおそらく色々な人たち、あるいは団体の人たちが相当に知恵を絞って連携していけば、だいぶ変わっていくのではないかなという感じを持っていますけれども、おそらくまちづくりといった面から非常に大きな部分のひとつになっているのではないかなと思います。

それでは、私の司会の不手際もありまして時間は4時15分くらいになってしまったんですが、4時半で閉会ということになっていますが、若干延ばしたいと思います。

会場の皆さんからご質問やご意見を賜りたいと思います。私の講演についての部分でもかまいませんし、今の座談会の部分でもかまいません。座談会の部分であれば、どのパネラーの方に対するご質問あるいはご意見ということで、誰々さんにといいことで言っていただければと思います。座談会の全員にといいると大変なので、一人ないし二人をそのときは指名していただきたいと思います。ではよろしく申し上げます。どうぞ手を上げていただければと思います。

参加者A>私は名倉さんの子育て支援のことなんですけれども、去年の11月から藤丸の8階のお部屋を市役所でお借りしていただいて、有効に利用させていただいています。

そして和室のところなんか高齢者のマージャンのお部屋で、週3回「マージャンすずめクラブ」という名前を皆さんに付けていただいて無料の卓も7卓ありまして、マージャンの分からない方にも教えさせていただいて脳の活性化ということでマージャンを楽しくやってるんですよ。

子育ての件なんですけれども、お部屋の中に親子連れさんが集るときがあるんですけれども、子供は少し少ないかなと気にしていたんですけれども、親御さんたちが集る中に私の意見がひとつ入れられたらと思うんですけれども、子育てというものは、親があつて子があつて、孫があつてというものなのかなと思うんですけれども、おじいちゃんおばあちゃんがあそこにはたくさん集るんですよ。ダンスとかコーラスとか勿論マージャンとか碁とか。そういうときにいい機会の場所で子供さんと親御さんとの中に、ひと月に1回、2回でも一緒になにかサークルを持てるような雰囲気があったら、(私も子供が3人おりまして、その子供がまた3人子供がおりまして、孫3人なんですけれども)いいことも悪いことも色んな子育ての失敗や、悲しいこと、苦しいこと、喜びが語れるんじゃないかなと思って。そうすると、名倉さんのように親御さんと離れている人であれば、経験した私たちが母親代わりになって色んなことを語れるんじゃないかと思い、そういう機会があったらなと思います。

それから図書館の件なんですけれども、入るときにほんと10円でも払うという窓口があれば、感謝した気持ちで本を見るということがあるんじゃないかなと思うんですよ。恐れ入ります。

横山>特にどなたかにお答えいただけますか？よろしいですか？

参加者A>よろしいです。

横山>では後ろの女性の方、どうぞ？

参加者B>質問のお答えは簡単で結構です。まず市長にいただきたいのと、内容については若干国際交流についてですので、林さんからアドバイスをいただければと思います。私は子育て中で、子供と関わる中で外国人の方と触れ合う機会がありまして、お互いすごく求めているのに、お互いの接点は数少ないなと感じています。ですから、多くの子供さんたち、それから今おっしゃっていた方の中で、お年寄りの方ですとか、外国人の方、子供たち同士の、うちの子もちょっと障害がありますので、障害のある方を含めた色んな交流がしたいなと、今企画しているところなんです。

どうしても国際交流って聞いてしまうと、英語ができなきゃダメかなとか、国際的なことに関心がないとダメかなというイメージが先行してしまうのではないかなと思うのですが、たまたま郵便局に行きましたら、外国人の方で30分くらいずっと待っている方がいらっちゃって、どうしたんですかと聞いて色々お話しすることができたんですが、そばに座って30分一緒にお話しするですとか、片言でもいいので何かお話しするだけでも、お互いのコミュニケーションがとれてとてもいいことじゃないかなと思うので、国際交流といわずに外国の方に限らず、困ってそうだなと思ったら横に座って、片言でもお話ししましょうっていう雰囲気づくりができれば、それが国際交流につながるんじゃないかなと思っているので、取り入れていただければいいかなと思うのが1つと、それから今、藤丸のスペースや、とかちプラザにも託児室という素晴らしい施設があるんですが、利用についてのハードルが高いんですね、イベントがあって、「今日のイベントは託児できますよ。でも木曜日までに申し込んでください。」藤丸も、「いいですよ。でも、飲食してはいけません。」ですとか、「親が必ずついていなければいけません」ですとか、そうしますと、ちょっとジュースが飲みたいな、ちょっと近くにいるおばあちゃんたちと一緒に遊びたいなと思ってもそばを離れることができない、一緒に飲んだり食べたりすることができない、どうしてもハードルが高い面があるので、そういう市としての体制ですね、私は札幌、旭川、小樽、色んなところを勤めてきましたが、帯広市は住みやすいと言われても、それは自然とかに、よりかかっているところが多くて、市の対応には色々と不満を抱えていることが多いので、ぜひ柔軟に、もっとハードルを低くしていただければ、子供を持ったお母さん達もお年寄りの方も色んなことに参加しやすくなるんじゃないかなと考えていますのでご意見をいただければと思います。

横山>それでは最初に林さんに対するご質問に答えていただいて、その後市長の方でできる範囲でお答えいただければと思います。

林> 先ほどの郵便局でのお話を聞くと、すごく感動して鳥肌が立ちました。私もまちを歩いていると外国人の方がいるとついニコッと笑いかけたりというところがあるので、英語ではなく、韓国人で、韓国語もしゃべれなくてもなんとなく心通じるものなんですね、なので私もそういったところを参考にして。自分自身も子育て中です。3歳の子供がいます。ちょっと国際交流とは話しがずれるかもしれませんが、藤丸さんの託児ですとか、こちらの託児、確かに木曜日までということで、私も昨日直前になってどうしても子供を見てもらうことになってお願いしたんですね、なので多分相談してみるとわりといい結果が出る場合があります。藤丸の託児についても、1例ですけれども、飲食についてはちょっとお願いすれば、こっそり開けてくれる場合もありますし、一応ルールというのはその業者ではあるとは思いますが、まず諦めずに聞いてみる、そして行政のほうも確かにこういうルールなのでというのが細かく分かれていて、なかなか融通が利かない時があるというのは私も感じています。そのへんをお願いします。

横山> では市長さん、よろしくお願いします。

砂川市長> 1点目ですけども、あまり外国人だとかいうことを意識しないようになれば一番いいですよ。人と人ですから、内地から来た観光客の人との関係でもいいし、お隣さん同士でもそうです。それから、外国の人とでもそう、ホスピタリティーというか、お互いに人と付き合うという感じは一緒だと思うんですよ、そういう気持ちが表れれば言葉は直接は関係ないのではないかなと思うんですよ。通じ合うものはかなりあるなっていうふうに。私も英語ができないものですから専らそういう感じでお付き合いさせていただいて、大体のところは大きな間違いは起こらないなとそういう気持ちがあればね。と思います。勿論英語ができれば一番いいんですけどね。

それから、色々な規則があって大変だという話でしたが、確かにそうです。林さんにお話ししていただいた通りだと思うんですけど、行政ですから例えば、私が林さんに対して一番いいやり方を考えていくという気持ちでやるんですけども、そういう人たちが17万人いますから、全部やるというのはなかなか難しい。ですから標準的なところで色々な規則とか、レベルだとかを決めていく。これが大前提ですね。それを理解していただいた上で、林さんから話しがあったように、最近は色々変わってきましたから相談していただければ、市の職員もある面では柔軟に対応してくれる場合が増えてきていると思います。

以前は、規則がこうだからこれでいいでしょうという対応だったんですけども、規則はこうだけれども、あなたの事情をお話しいただければ、出来るだけのことはしていきましょうという対応をしてほしいと僕は職員にも言っていますし、そういう対応は増えてきているとは思っていますが、まだ十分ではないかもしれませんが諦めないで、最初から行政はダメだと言わないで、率直に相談をしていただければそのような対応はさせていただけると思います。そういうふうに努めていきたいと思っています。

横山 > どうもありがとうございました。それでは、もう一名の方で打ち切りたいと思います。どうぞ。

参加者C > 私は、柏林台の方に住んでおります。久保さんが大空もかなり高齢者がいるとおっしゃっておられましたけれども、柏林台もそれに負けないほどいらっしゃいます。

高齢者の方々は大変な生活をされているわけです。私は柏林台の西町の2、3年前にできた高層（市営住宅）に住んでいるんですけども、大体7割は75歳以上の高齢者ですね。

それと体の不自由な方、そういう方が住んでいる団地なんです。それで、これは市長さんに要望したいと思うんですけども、柏林台には集会所が生活館と福祉センターの2つあります。

そちらのほうの人たちは、何かあってもそちらのほうへ歩いても行けるような状態ですけども、私たちの住んでいるところはかなり端の方でありまして、そこに行くとなると当然歩いて行けなかったり、手を借りなきゃいけなかったり、そういうことで、結局、私は行けませんと足が遠のいてしまうということで、市長さんをお願いしたいことは、前の条例では何年前か知りませんが、その時は皆さん当然若かったですよね、だからどこへでも行けたんですけども、今現在は75歳、80歳、80何歳という方も住んでいるわけですね。当然高齢化の時代の波ですね。そういうことで何とか私たちの住んでいる近くに集会所をお願いしたい。本当に切なる思いなんです。皆さん方ゆっくり歩いていくといっても大変なんです。それに私たちも一人一人乗せていうのも大変なことなんです。市政の財政も大変なことはよく分かります。しかし、そんなにお金をかけなくてもいいですから、皆さん方が気軽にそこなら近いから行けますよという施設を作っていただければと思います。

それともう一点、先日も新聞に載りましたが、稲田と柏林台の空き地を民間に売却するというような記事がありましたね、市長さん。見ませんでしたか。私は見たんです。今、団地というのは高齢者の集まりですね。これからあそこにまだ4棟ほど建つというお話しも聞いております。その4棟が出来れば、若い方を入れてほしいと思います。そうしなければ本当に高齢者の集りで、町内の運営も出来ない状態になってしまいます。そういうことを考えますと、市有地を売却することになってしまうと、モデル団地として何年前に入りましたがそれも当然消えてしまうと思います。それと共に若い人もいなくなってしまいます。そういうことで、市長さんに要望としてお話ししましたけれども、見解をお願いします。

横山 > どうもありがとうございました。時間もだいぶ経ってききましたので、これで、市長さんに今日のまとめと感想を述べていただきたいと思います。今のご質問に対してお答えいただける範囲でお答えしていただければと思います。そしてその上で、時間が短くて申し訳ないのですが、今日の座談会のまとめと感想をお願いします。

砂川 > 今日の会合で色々な課題、重要なことを再認識させていただきました。非常に興味のある

お話しがありました。名倉さんのお話で、子育て環境も変わってきたけれども、子育てする方々も変わってきますから、どんどん“こういうのがあればいいな”という要求の項目やレベルが上がってくるという話でありましたが、これは非常に大事なところで、お話にありましたが、全てが受け身的に“あれがあればいい”“これがあればいい”とやっていかれると、どんどんどんどんエスカレートするしかないわけですよ。世界で一番の水準を、全ての項目において求めなければならないということになりかねませんから、そういうことはまず不可能ですので、そういう要求、要望はありますからこれからはそれを実現していくためにはどうしたらいいか、行政にはどんなことをやってもらいたい、自分たちはそれに対してそれと同じように、こういうことは出来るから行政と一緒に色々と考えていきましょうと物事を進めていったほうが生産的な話になるのではないかと考えていますし、そういう意味では市民協働ということになるのではないかなと思っています。

受益者負担の話もありましたけれども、これも自分たちの意識、参加する意識、参加を高めるのに役立つ1つの手法ではあるかもしれませんが行政が全て負担していれば、“行政がただでやってくれるんだから参加しようかな”、“面白くないことでもただだからしょうがないかな”ということでは、やっていること自体がレベルが低くなってそこで収まっちゃうということで、住民の期待に応えられないということになるのではないかなと思います。少しでも自分がお金で負担するか、自分たちの知恵で負担するか、労力で負担するか、自分たちもそれに参加して力を出しているということになれば、その成果を要求しますから、こういうレベルまでいかなきゃだめだとか、こういう内容はしっかりやっていかなければならないということになりますから、そういうことのほうがより前向きの話になるのかなと、1つの契機になるのではないかなと思っています。これは、受益者負担をこれからどんどんやっていくということではないですよ。考え方は一つ、そういうことであるのではないかなと思いました。市民の皆さんの意識も変わってきているし、変わっていかねばならない部分もありましょうし、私の意識も変わらなきゃいけないし、帯広市の行政担当職員の意識も変わっていかねばならないという時期に来ているんじゃないかなと思いました。

それから柏林台の方のお話しですけども、お話しはよくわかります。柏林台はユニバーサルデザインモデル地区で、全てのことをできるだけやっついこうということで進めています。

高齢者の方が多いということも承知していますが、大空もそうかもしれませんし、それぞれの地域で色んな課題があると思っています。お話しになられたのは、そういう課題をよくわかって、なんとかしなければいけないという気持ちがあるし、行動したいというお気持ちですからね、そういうことで参加してご意見をいただいたと思いますので、色んな地域ごとに要望しなきゃならないこと、整備しなきゃならないことがあると思いますので、私どもとしてはそういう声を聞きながら出来る範囲で一緒にどういうことが出来るかを考えるという姿勢で臨みたいと思っています。以上です。

横山> どうもありがとうございました。時間の関係もあるため、私のほうで最後にまとめること

はいたしません。

今日は、非常に長い時間だったんですけども、最後まで熱心に議論いただいた座談会の参加者の皆さん、そして、色々ご質問いただきました参加者の皆さん、会場の皆さん、本当にありがとうございました。司会の不手際で進行のほうと思うに任せない部分もあったんですけども、それは私の責任だと思います。

4月からはいよいよまちづくり基本条例が施行されるということで、帯広市のまちづくりが一層進みますことを期待したいと思います。どうもありがとうございました。

司会> それでは、皆様ありがとうございました。以上をもちまして、「まちづくり基本条例制定記念フォーラム」を閉会させていただきます。

改めまして、横山先生はじめ発言者の皆さんに拍手をお願いしたいと思います。

(拍手)

本日は、お忙しいところありがとうございました。また、長時間に渡りましてご参加いただいた皆さん、どうもありがとうございました。

どうぞ、お気をつけてお帰り下さい。ありがとうございました。